



Title	スウェーデン語と日本語における役割語の対照研究 ー〈時代ことば〉を中心にー
Author(s)	Lindskog, Sven Sebastian
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (SVEN SEBASTIAN LINDSKOG)	
論文題名	スウェーデン語と日本語における役割語の対照研究 — 〈時代ことば〉を中心に —
論文内容の要旨 本論文は、日本語とスウェーデン語それぞれの翻訳作品における〈時代ことば〉の実態調査と、それに基づく理論的考察を目的とするものである。〈時代ことば〉とは役割語の一種である。ここでいう役割語とは主にフィクション作品で出て来るキャラクターの「わしは博士じゃ」（老人）や「拙者は侍でござる」のようなステレオタイプの話し方を指す。日本語における〈時代ことば〉の研究としては金水（2012）があり、歴史的なキャラクターが、一人称「拙者」や動詞「ござる」「まいる」「もうす」という〈時代ことば〉を用いる武士キャラクターであることを指摘している。さらに、金水（2018）は、さまざまな種類の〈時代ことば〉のキャラクターを取り上げ、それらを以下のように分類する。 ・性差で分類：書生 ・職業・階層で分類：軍隊語、遊女ことば、王様ことば、お嬢様ことば ・時代で分類：武士ことば、忍者ことば、公家ことば、遊女ことば、町人ことば、股旅ことば 中でも翻訳における〈時代ことば〉の活用については金田（2012）が取り上げ、これを論じている。金田氏は、日本語から英語に翻訳されたテレビゲーム『ファイナルファンタジーVI』で登場するカイエンという武士キャラクターの発話分析を行った。そして、金田氏は、カイエンの話し方について、自称詞に「拙者」、語尾に「〜でござる」を用い、話し方は典型的な武士キャラクターのようになっていると述べる。また、英語版では、呼びかけ詞の<i>sir</i>を用いることに加え、単数<i>you</i>の代りに古語の<i>thou</i>を使用するが、この<i>thou</i>がちょうど日本語の「でござる」語尾に相当する役割語要素になっていることがわかったと述べる。 一方、スウェーデン語における役割語研究は不明な点が多い。スウェーデン語では、日本語のように豊富な人称代名詞と文末表現がないため、日訳の大きな問題点とは役割語の翻訳である。例えば、人称代名詞の豊富な日本語では特定のキャラクターを表わすことは容易であるが、スウェーデン語では単複数形の一人称代名詞<i>jag/vi</i>しかなく、人称代名詞で特定のキャラクターを表わすことは難しいため、キャラクターにどのように特徴づけるかは問題点となりうる。また〈時代ことば〉研究としては、王様による「尊厳の複数」（自分を複数形で自称すること）や聖書の古典的な要素を取り上げるBergman（2013）があるが、スウェーデン語作品におけるキャラクターの発話分析を行う先行研究は非常に少ない。 このように、日本語、スウェーデン語ともに〈時代ことば〉の研究は未だ不十分な段階と言える。さらに、翻訳への影響ということになると、先行研究がほぼ見当たらない状況である。このような研究上の空白を埋めるため、本論文では次のような構想のもとに、研究を組み立てる。 まずスウェーデン語・日本語における〈時代ことば〉による翻訳の源泉として一候補とされる聖書の言葉を取り上げる。その理由は、スウェーデンでは、さまざまな聖書の翻訳がある。初の翻訳は1526年の新約聖書であるが、グスタフ・ヴァサ聖書という全聖書は1541年に刊行した。この聖書の翻訳は完成当時にも古語的な言語で記された。その後に訳された聖書は言葉の綴り方の改め以外、変更点はほぼなく、1541年の聖書（1703年からカール12世聖書と呼ばれた）は1917年まで日常的に使用されたものである。多くの人々は毎週日曜日、教会に行き、学校でこの聖書を学ぶため、聖書独特な表現を熟知しているらしい。それゆえ、聖書での表現を他ジャンルの作品の、特に〈時代ことば〉に対して、その表現が強く影響したと予測される。そこで、他ジャンルの作品は、広く読まれた聖書にどの程度に影響されているかを明らかにしたいと考える。 その一方、日本聖書としては文語体で記された2014年の『文語訳 新約聖書 詩篇付』を用いる。本訳の底本は、よく知られている1917年に刊行された『改訳 新約聖書』と1888年の『旧約全書』の改訂版である。本訳は、1955年までによく普及した影響により、その〈神様語〉の役割語が現在にも広く認識されている。例えば、人称代名詞	

「われ」と「なんじ」の併用や祈りの「たまえ」という命令形などの役割語を知る人は少なくなく、スウェーデン聖書のように日本聖書もまた他作品のことばへの影響力が強いと考えられる。

このような聖書翻訳の実態を踏まえながら、「他の言語→日本語・スウェーデン語」「スウェーデン語→日本語」「日本語→スウェーデン語」それぞれの翻訳における時代語の実態調査を行う。他の言語から日本語・スウェーデン語に翻訳された作品としては、シェイクスピア劇を取り上げる。日本語からスウェーデン語、及びスウェーデン語から日本語に翻訳され、〈時代ことば〉を用いる作品に相当の制限がある。その制限をクリアするため、世界中に高く評判され、近現代にわたって多くの翻訳者によって日本語とスウェーデン語に訳されているシェイクスピア劇の『ハムレット』（1603）と『リア王』（1608）の〈時代ことば〉を調査した。宗教や聖書の言葉からの影響が見られるシェイクスピアの『ハムレット』と『リア王』は、スウェーデン語版のHagberg訳では、特に文体で聖書から強い影響を受けていることが明らかであり、日本語訳でも「祈り」や神への呼びかけでは聖書の文語訳からの影響が想定されるため、聖書の言葉を源泉とする本研究にとって適切な作品だと考える。

しかし、聖書の言葉のみならず、シェイクスピア劇では王様キャラクターには大きな役割が担われており、日本語とスウェーデン語訳にも〈時代ことば〉の一つである〈王様ことば〉の役割語が見られる。どのような〈王様ことば〉があるかを明らかにするため、Bergman（2013）や刘（2012）を参考にしながら、原文におけるシェイクスピア劇の近現代における日典訳の〈王様ことば〉は、それぞれの言語にどのように翻訳され、特にどのような人称代名詞の使用傾向があるかを分析した。

スウェーデン語から日本語への翻訳の例としては、スウェーデンの聖書で使用されている言葉と当時で出版されたスウェーデンのストリンドベリの自然主義の定義作品『赤い部屋』（1879）の登場人物が使用している言葉を取り上げる。当時のスウェーデンの社会で使用された言葉遣いが数多く見出される『赤い部屋』は、聖書の特有の〈時代ことば〉を特定するために適切な比較作品になると考える。更に、『赤い部屋』は現代スウェーデン語に起源を持つものの、現代から見れば、古風な言葉遣いが数多く見られる。現代スウェーデン語との相違点を示すため、自然主義の『赤い部屋』と厳粛な言語の豊かなストリンドベリ劇の『父』（1887）、『令嬢と召使』（1888）や*Ett Drömspel*（『夢の劇』）（1901）の言語と比較する。

また、スウェーデン聖書（カール12世の聖書）は、1526年から1917年まで使われたため、恐らく1900年代の当時の人にとって最も時代外れの言語を使った聖書だったと考えられる。この時代外れの言語は、聖書以外の作品に使用されたかを調べる必要があると考える。Teleman（2007:106）は、カール12世聖書を当時の1900年代の劇と比較する。劇は厳粛なスウェーデン語を用いる傾向があったが、20世紀後半では劇の言語をはじめ、厳粛なスウェーデン語で行われた説教、公演やスピーチの言葉遣いも使わなくなっていたと述べる。このように取り上げられるストリンドベリ劇には厳粛な〈時代ことば〉がどのように表現されるかを論じ、聖書の言葉と共通点があるかを確かめる。

日本語からスウェーデン語への翻訳の例としては、村上春樹の現代小説『海辺のカフカ』、『1Q84』と『騎士団長殺し』がある。これらの作品の舞台は現代日本であるものの、古めかしいまたは奇妙な話し方をするキャラクターの出現が多いが、その現代設定での古めかしい要素や奇妙な言葉遣いはどのようにスウェーデン語に翻訳されているかを検討する。その目的は、翻訳者がこのような日本語の〈時代ことば〉、または古い言語の要素を、翻訳目的語のスウェーデン語にどのように置き換え、スウェーデン語の〈時代ことば〉に対してどのような概念を抱いているかを確認することである。村上春樹作品のスウェーデン語版の〈時代ことば〉は聖書の言葉に影響されていると想定されるが、言語のバリエーションが遥かに勝っている日本語では必ずしもそうではないと考えられる。なぜなら、日本では聖書以外、『平家物語』の軍記物や江戸時代の文楽等の豊富な〈時代ことば〉を扱う資源があるからである。〈時代ことば〉はどのように翻訳されているかを調べることで、スウェーデン語にもどのような〈時代ことば〉の役割語があるか、予測しうる可能性があると考えている。また、日本語に翻訳されていないが、Guillou（1998）の執筆した*Vägen till Jerusalem*（『エルサレムへの道』）等という12世紀を舞台とするスウェーデン語の騎士小説では、登場人物はどのような言葉遣いを用いるか、その話し方に〈時代ことば〉が含まれているかを明確するため、本小説を分析した。これによりスウェーデン語に翻訳された村上春樹の作品の〈時代ことば〉との間に共通点が認められるかどうかが明らかとなり、役割語としての立場も強くなると考える。

最後に、以上の実態調査に基づいて、翻訳に〈時代ことば〉が採用される場合の一般的傾向と、その個別性について考察を行う。それぞれの言語作品の実態調査によって、日本語から翻訳された作品にどのようなスウェーデン語の役割語が用いられるのか、またスウェーデン語から翻訳された作品には如何なる基準で役割語が使われているのか、明らかになると予想される。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Sven Sebastian Lindskog)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	金水 敏
	副 査	大阪大学 教授	岡島 昭浩
	副 査	大阪大学 准教授	岸本 恵実
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： スウェーデン語と日本語における役割語の対照研究

— 〈時代ことば〉を中心に—

学位申請者 Sven Sebastian Lindskog

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	金水 敏
副査	大阪大学教授	岡島 昭浩
副査	大阪大学准教授	岸本 恵実

【論文内容の要旨】

本論文は、役割語の観点から、日本語とスウェーデン語の対照研究を試みるものである。役割語とは、話し手のキャラクターと対応した発話スタイルのヴァリエーションを指し示す概念で、本論文では特に「時代ことば」を中心に考察している。時代ことばとは、現代のことばではなく、古い時代に属するスタイルと感じさせるような話し方で、物語の世界が過去のものであることや、当該の話し手が特に古風なキャラクターであることや、神仏が話す時の厳かな雰囲気を醸し出していることなどを示すために用いられる。日本語においては、武士言葉、公家ことば、神様語、花魁ことば等がこの時代ことばに属するヴァリエーションとして知られているが、スウェーデン語では全般に役割語あるいはそれに類するスタイルのヴァリエーションについての研究が未だ手薄であり、研究のための調査や手法などについて開拓していく必要がある。この点で、本論文は当該分野における先駆的な研究として位置付けられる。以下、第1章以降の構成と内容についてまとめることとする。

第1章は「役割語」の定義を述べる。第2章は調査方法と調査対象の作品について説明する。第3章では調査結果を述べる。

第3章の1ではスウェーデン語と日本語の対訳テキストにおける時代ことばの例について示す。スウェーデン語の作品としては『赤い部屋』を、日本語の作品としては『海辺のカフカ』を取り上げる。2では、日本語とスウェーデン語の時代ことばの源泉の一つとなった聖書の翻訳について説明する。3では、シェークスピアの『ハムレット』および『リア王』がスウェーデン語および日本語でどのように翻訳されたかという問題を取り上げ、両言語の対照を見ていく。特に、原作に現れる *royal we* と呼ばれる、王のみが用いる一人称複数形がどのように両言語で翻訳されているかを確かめる。4では、1998年に Guillou によって執筆された *Vägen till Jerusalem* という騎士に関する小説に現れた時代ことばを検証する。5では、『騎士団長殺し』のスウェーデン語訳における「騎士団長」の話し方について検討する。6では、『1Q84』における「ふかえり」の発話の中で、平家物語やバッハの声楽曲の歌詞が現れる場面を取り上げ、その翻訳の方略を確認する。

第4章は終章であり、論文全体のまとめを行う。

【論文審査の結果の要旨】

本論文では、スウェーデンにおける聖書の翻訳史を振り返り、1541年に刊行され、1917年まで使用され続けた『グスタフ・ヴァサ聖書』が資料として適切であるとした。スウェーデンの多くの人々は、毎週日曜日に教会に行き、この聖書を学んでいるため、聖書独自の表現をよく知っているからである。聖書独自の言葉遣い＝〈聖書語〉が、スウェーデン語における時代ことばの有力な候補となるという仮説のもと、聖書に用いられて現代語とは異なる人称代名詞の語彙や動詞、接続詞、否定辞等の語彙を洗い出している。その上で、フィクションに用いられる時代ことばに〈聖書語〉と共通の要素が見られるかどうか検証している。具体的には、ストリンドベリの *Ett Drömspel* (『夢の劇』) に登場するアングネスという人物の発話である。アングネスの父はインドラという神である。アングネスは人間界にいる時は、人間と同様に、現代の話し言葉的な表現を用いるが、インドラの娘と知られたあとは、〈聖書語〉と普通の表現を使い分けるようになっていく。この観察から、聖書の言葉遣いがスウェーデン語の時代ことばの資源であるという仮説の妥当性が有効であることが示されたと考えられる。この他、村上春樹の一連の小説に登場する古風な話し方をする登場人物の台詞や、古典の引用等において、スウェーデン語の翻訳にどのような工夫が見られるかを詳細に検討するなど、翻訳の実践においても有用な分析を積み重ねている。

一方で、いくつかの点で問題も指摘できる。「時代ことば」「聖書語」など、本論文にとって重要な用語が、定義を経ぬまま用いられているので、論旨がつかみにくくなっている箇所がある。代名詞や呼称の整理において呼格とその他の指示的格との区別がなされていないなど、言語学的に必要な配慮が為されていないため、分かりにくい記述となっている面がある。対訳テキストを用いて両言語の違いについて検討する際、問題となる表現のみ取り出して、日本語なら日本語のテキスト内部における体系性を十分つかみきれていない箇所がある。単発の論文を博論としてまとめ直した際に、記述や引用の重複があるのを十分に修正し切れていない箇所もある。その他、いくつかの理由で読みにくさを生じさせている箇所が残ってしまったことは否定できない。今後、慎重な修正が求められる所以である。

とは言え、日本語の役割語の理論を土台にして、かつてないスウェーデン語の役割語研究の基礎を示したという点で、本論文が持つ価値は小さくない。ことに、聖書の翻訳を基盤として時代ことばについて考察することの有用性が示し得た点は十分評価に値する。この点において、学位申請論文としてふさわしいものと結論づける次第である。